

祖父の出征体験のこと

山本慎子（祖母から聞いた話 当時、祖父は姫路市在住 24歳頃の話）

私が子どもの頃、祖母が家に来て面倒を見てくれていました。寝る前には、色んな話をしてくれましたが、何度もせがんで聞いたのが戦争の話でした。祖父は、私が0才の時に他界したので直接話は聞いていませんが、祖母に海軍時代の話も色々と教えてもらいました。

その祖母も数年前に他界し、後に母から、祖母は戦争の話は聞いても嫌がってしてくれなかったという事を聞き、遠い過去の事ですが、申し訳ないことをしたな…と思いました。しかし、身近な人から戦争体験の話を聞くことが出来た事については、今は亡き祖母に感謝をしています。

数年前に、祖母が住んでいた家を取り壊す際に、写真が出てきました。ゆっくり見てみたいと思いつつも日々追われ、忘れかけていました。こういう機会があったことで、写真を見ながら想いを馳せることが出来た事、有り難く思います。

「祖父のこと」

昭和16年1月、海軍に入り通信兵の勉強をしてから、戦地に赴いたようです。その後、伊号一五三潜水艦や、巡洋艦最上、他数隻の船で通信兵として務めました。出兵しては帰国を繰り返していましたが、ある時南洋で乗っていた船が敵機の攻撃を受け、船が沈みかけたそうです。サメもいるかもしれない海域でしたが、迷っている暇もなく、甲板から海に飛び込んだそうです。沈む船に巻き込まれないように出来るだけ船体から離れようと泳いだ、と聞きました。着の身着のまま飛び込んだので、救命具もなく、立ち泳ぎをしながら爆破されてバラバラになった船体の木材につかまり、浮き輪代わりにしたといいます。近くに島影もなく、ただ潮の流れに任せて浮かんでいたそうです。中には気力体力が尽きて海中に沈んでしまった仲間もおられたようです。祖父も、意識がもうろうとする中、こんなところで死んでたまるかという気力だけで木にしがみ付いていたそうです。数百人乗っていた船員のうち、30人ほどが南の島に漂着。そこがどこかも分からなかったのですが、皆で上陸し、火を起こして身を寄せ合ったそうです。持っているものと言えばナイフくらい。葉にたまった露を集めて飲み、ヘビやトカゲを探しては皮をむき、木の棒にさして火に炙って食したりして、飢えをしのいだそうです。それでも日が経つごとに、栄養失調や病気で命を落とす仲間もいて、その度に地面を掘って埋め、お墓を作ったそうです。

島でどれくらい過ごしたかはわかりませんが、ある日、迎える日本の船が来ることになりました。「よかった…これで日本に帰られる！」皆連れて帰ってもらえるものとはばかり思っていたのですが、こう

言われたそうです。「自力で立てたものだけ船に乗せてやる」と。ろくな食事もとらず、立ち上がる気力さえも残っていない人が大多数だったようです。

祖父も、限界を感じていましたが、ここで立たないと死ぬのを待っただけだと思い、最後の力を振り絞って立ち上がったそうです。一緒にいた仲間でも立たない人もいたので、泣きながら「連れて帰ってくれ」と懇願する人もいたそうですが、非情にも船は出発したそうです。船に乗った人は皆断腸の思いで辛かっただろうと思います。日本へ向かう途中でも、船内で衰弱死や病死者が出たと聞きました。そういった方は、そのまま海へ葬られたそうです。夢にまでみた帰国は目の前なのにと、いたたまれない気持ちになりました。